

社会変革の旗手としての女性研究者を求めて

Looking for Female Professors / Scientists as Leaders for Innovative Society

谷口 功 Isao TANIGUCHI

昨今、男女共同参画について、あちこちで取り組まれている。こうして取り組まねばならないことこそ、我が国の社会の大きな課題を示している。当たり前、社会の縮図として女性男性の区別なく皆が協力して運営できる体制になることが望まれる。とは言え、とくに、理工系の部局においては、女子学生の比率に比べて、教員（より一般化して研究者という）の中の女性の割合はきわめて小さい。とくに、教授などのいわゆる上位職に占める女性研究者の割合が少ない。諸外国に比べて我が国の女性研究者の比率は極端に小さいことは言うまでもない。女性研究者を採用するにあたって、応募数が少ない問題があるが、それは、母集団としての女性研究者が少ないことに依存する。これでは、女子学生にとってもその将来の姿が見えないので、将来の研究者を目指して頑張ることにならない。女性研究者が活躍できる体制を創ることが必要である。今から人材（財）を育てることは必要不可欠ではあるが、それでは間に合わない。

なぜ、女性研究者の増加が必要なのか。これからの少子化社会の中で人材（財）不足が深刻になるので女性の活躍の場が益々増加するはずである。研究者についても同じである。その中で女子学生に将来像を身近に見せることや当たり前の社会としてのあり方であることに加えて、より重要なことは、これからの社会において本当に変革を支えるのはむしろ女性ではないかと考えている。最近、学生で海外留学を希望する者の数は圧倒的に女性が多い。この傾向は、我が国だけではなく、アジア諸国でも同様である。先般、本学に留学してきた留学生の構成を見ても女性が多い。アジアばかりではない。世界のどの地域からの留学生も同じである。最近の日本人学生や留学生を見ていると、一般に女性のほうが外向き志向が強く、また社交的でもある。これからの社会は、変革が日常となる社会である。その中では、社会の変化を現実的に即して対処し、かつ変化を恐れることなく受け入れることに優れた女

性のほうが高い適性をもっているようにも思われる。

本学では、文部科学省が支援している男女共同参画事業に応募することで、学内の男女共同参画の環境を整えつつ、当たり前の社会の実現に向けて取り組んでいる。熊本や九州の地は、かつて「男尊女卑」の典型的な地域と称され、今も多くの人がそのような誤解（であって欲しい）している。その誤解を熊本の地から解き放つことに取り組んでいる。

かつて工学部長時代に、女性研究者との懇談会などに出席した際、「女性教授のいない部局の長が何を言っても信用しない」と、他学部の女性教授から痛烈に言われたことを今も思い出す。我が家に帰っても、女性陣ばかりで彼女らは一致団結しているので、家庭でも散々である。また、娘は、長年アメリカで学生生活をして頑張ってきたこともあって、平等意識がしっかりしている。男女差別に繋がる言動の一つ一つにきわめて手厳しい。しかし、それらは、私自身の考えを適正に修正するにはきわめて有効である。

女性研究者が正当に頑張れるという当たり前の状態を実現したい。本学では、現在、理工系部局（教員はすべて、大学院自然科学研究科の所属）の女性研究者は4%程度である。研究者は200人程度であるから、女性研究者を男女共同参画事業などの活用で、女性枠をつくり（当たり前の状態をつくるために、このような特別枠をつくらなければならない）増加させる。その枠で、教授職を含めて12~13人増やせば20名程度になり、全体の10%となる。これを5~8年間で達成したい。別途、通常の採用活動の中でも増やしていけば15%も夢ではない。目標は15%と設定している。そのときには、多分、古い「男尊女卑」の言葉も消えるのではないかと思っている。これを実現するための秘策も考えている。優れた女性研究者を私自身も広く探している。そのためには、必要に応じて、その配偶者もまとめて職場のお世話をするくらいのことはもちろん考えている。これからの公募に是非応募いただきたい。



谷口 功 Isao TANIGUCHI

熊本大学・学長
工学博士（東京工業大学）
東京工業大学・大学院博士課程（化学工学専攻）修了（S.50年3月）
専門は生物電気化学、電気化学、界面化学、機能分子化学

E-mail: taniguch@gpo.kumamoto-u.ac.jp

日本化学会学術賞（1995）：電気化学会論文賞（2005）：
錯体化学会賞（2009）など